

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

September 2011 vol.14



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「雪舟 花鳥を描く ―花鳥図屏風の系譜―」

雪舟の絵でどれがいちばん好きですか?

企画展「日本のわざと美」展 ―重要無形文化財とそれを支える人々―

美の結晶―「人間国宝」の世界

企画展「mite! ね。しまね ―島根県立美術館のコレクションを中心に―」

違いを楽しむことが考える力をつける第一歩

14



雪舟《四季花鳥図屏風》(左隻) 京都国立博物館蔵

「雪舟 花鳥を描く —花鳥図屏風の系譜—」

2011年10月22日(土)～11月23日(水・祝)

休館日:会期中無休

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A. 雪舟
《四季花鳥図屏風》(右隻)
京都国立博物館蔵

雪舟の絵でどれがいちばん好きですか？

雪舟の絵でどれがいちばん好きですか？と問われたら、いくつかの作品が頭をよぎったとしても、やはり最終的にはこの作品を選ぶだろう。《四季花鳥図屏風》(表紙、図A)である。雪舟の「名作」を暢気に称揚するつもりはないが、作品の充実度という点では、雪舟作品(実際には、広く真筆と認められているものから、研究者によって意見の分かれるもの、出来のよい模作まで微妙な幅があって、なかなか明瞭な像を結ぶものではないが)のなかでは、長さ16メートルにも及ぶ《山水長巻》(毛利博物館蔵)と双璧をなすものである。本作は縦164.2cm、横354.8cmで2隻1組になる6曲1双屏風。いま知られるなかでは雪舟作品唯一の大画面形式である。

屏風の向かって右から左へと、春、夏、秋、冬、4つの季節が展開する構成で、画面の右から松樹、左から梅樹の巨木が、それぞれに向かって呼応するかのように全体を貫いている。鶴や叭々鳥、鷺や鴛鴦といった大小の鳥類があいだに遊び、なかほどには広い湖面が見えている。ごつごつとした太い松樹はもだえるようにC字を描き、枝先は意志をもつかのように下方へと向かう。梅樹はこれに輪をかけて、びりびりと神経質に屈曲しながら枝先をどこまでも伸ばしてゆく。枝の折

れまがりが前後左右に自在で奇怪な動きを見せるとともに、太い幹をかこむ巨岩や、中景の水流、遠景の雪山など、何層にもわたるさまざまな景物が幾重にも複雑に折りかさなる。息が詰まるほどに圧縮された空間には、画面を構成する多くのモチーフがじつに有機的に配置されている。

本作の魅力を一言でいうならば、構築力の比類なき強さである。かくも複雑多様な構成要素を筆の力で描ききる強靱なストラクチャーである。濃淡、剛柔、軽重、遅速といった絵画的で物質的な振幅に自覚的で、きわめて強い意志をもつその構築力は、雪舟という人物の作品に固有の属性をあたえる性質のものである。それは画面を構成する個々のモチーフの確かで存在感のある形態描写にささえられたものであり、さらに細部では描線の筆致や質によってささえられたものである。こうした特性において雪舟はすぐれた画家といえる。

この特性は雪舟作品全般にみられる特性ともいえるが、その点においても、本作はやはり山水長巻と並んできわまった存在である。そうした雪舟作品にみられる絵画的要素は、やはり誰もが簡単に手にすることのできない性質のものであった。たとえば雪舟の後継者たちによる花鳥図屏風の系譜

を追えば、雪舟にあったはずの構築力はうすすぎ、平面的にそれぞれのモチーフが配置される傾向がみえてくる。梅樹のこれだけ複雑に屈曲しながら枝先を伸ばして、なお梅樹そのものの生命を感じさせる描写の質は、残念ながら雪舟の後継者たちが得ることのできない代物だった。

濃淡のメリハリが効いた確かな形態描写による画面構築。雪舟作品の強さは、つきつめればここにあると思う。もちろん他にも見どころはいろいろとあって、意外にカラリストだったり(本作もかなり清澄な色彩が効いている)、ぼてっと黒々とした墨の塗りかたとか、中央の鶴のうしろあたりのよく意味のわからない抽象的な中景などなど…。作品の全体を引いて見たり、近づいて見たり、一つ一つのモチーフの形を確かめ、一本一本の線を目で追っていく。現物を目前にして、はじめて経験できる種類の視覚的な悦楽がまちがいにこの作品にはある。そしてその視覚体験の先に、ある独特の質をもった感興が呼び覚まされる…。

と、くどくどと述べましたが、そういうところがこの作品の好きどころです(といいつつ山水長巻もかなり好きですが)。

「日本のわざと美」展 —重要無形文化財とそれを支える人々—

2011年12月17日(土)～2012年1月23日(月)

休館日:火曜日(ただし1月3日は開館)、12月28日(水)～1月1日(日)
開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

企
画
展



図1



図2



図3

図1. 十四代酒井田柿右衛門 濁手枝垂桜文鉢 平成2年 文化庁蔵

図2. 林駒夫 「左近の櫻」木芯桐塑紙貼 平成18年 文化庁蔵

図3. 森口華弘 友禅訪問着「精華」 平成元年 文化庁蔵

美の結晶—「人間国宝」の世界

この展覧会は、工芸技術分野において、これまでに認定された全ての重要無形文化財保持者(いわゆる「人間国宝」)の作品165点と、重要無形文化財保持団体の作品17点をはじめ、その製作過程を示した工程見本、用具や材料の製作・生産にかかわる選定保存技術の関連資料を紹介するものである。

内容に入る前に、まずはこの「人間国宝」がどういふものかを含め、そのしくみについて少し触れておきたい。私たちがよく耳にする「人間国宝」というのは一般的に用いられる通称で、「重要無形文化財保持者」というのが正式な名称である。これは「文化財」という言葉を初めて世にだし、その保存と活用を図るために制定された日本の法律、文化財保護法に基づいて認定基準が定められている。ではこの名称にある「無形文化財」とは何なのか。これは、建造物や絵画など、形あるものを対象とする有形文化財に対して、芸能や工芸技術など特定の個人や団体が伝承し、高度に体得している「わざ」をさす。国はこうした優れた我が国最高の「わざ」を体現できる人、または団体を重要無形文化財の「保持者」「保持団体」として認定し、その伝統と多年にわたる修練でうみだされた技術を後世に残すべく、保存と活用

の施策を講じている。本展覧会の開催もまた、文化庁の全面協力を得て人間国宝のわざと美の世界を紹介することで、その普及にひとつの役割を担っている。

この重要無形文化財の指定と保持者の認定は、昭和30年2月を第一次として、ほぼ毎年1回行われ、現在にいたる。保持者が死去した場合や、保持団体が解散した場合などは自然に解除となり、これらが全てなくなった時は、重要無形文化財自体の指定も解除となる。なお、ひとつの重要無形文化財に対して、保持者は一人とは限らず、例えば北村武資氏のように、染織の「羅」と「経錦」の両方で認定を受ける場合がある。また、これらの技術は世代を超えて受け継がれることも多いため、親子の二代で保持者の認定を受けた例もある。

今回の展覧会の大きなみどころは、過去に認定を受けた故人も含め、第一次認定から現在にいたるまでの全ての「人間国宝」の主要な作品が一堂に会することである。陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・手漉和紙・截金・撥鏝の9種別のなかから、それぞれの究極の「わざ」が生み出す造形美が、思う存分堪能できる。いずれも技術のみの錬磨にとどまらず、表現の研究を積み重ね、独自の創作性をも加味した珠

玉の作品群となるが、これらをまとめて見る機会はなかなか得られない。

また、「わざ」を受け継いでいく背景には、同時に優れた用具の製作や、良質の材料の生産技術が欠かせない。良いものが揃わなければその存続自体が危ぶまれてしまうためだ。文化財保護法では、「文化財の保存のために欠くことのできないもので保存の措置を講ずる必要のあるもの」を選定し、「選定保存技術」として技術者の育成、記録作成などの保護処置をとることを定めている。本展ではこれらの技術に関連資料等で紹介する。

なお、島根県出身者で、重要無形文化財保持者に認定された人物には、手漉和紙「雁皮紙」の阿部榮四郎氏(1902～84)がおり、現在も活躍を続ける「鉄釉陶器」の原清氏(1936年生)がいる。さらに保持団体として「石州半紙」の石州半紙技術者会。選定保存技術として「玉鋼製造(たたら吹き)」がある。島根で生まれ、郷土の地に守り継がれてきた「わざ」の素晴らしさを再認識する好機ともいえよう。現代を生きる私たちは、未来の設計図に何を描き、何を遺していくべきか。先人の知恵と研鑽に思いをはせながら、美の結晶を楽しんでいただきたい。

(左近直 充美 当館主任学芸員)

「mite!ね。しまね ー島根県立美術館のコレクションを中心にー」

2012年2月11日(土)～3月26日(月)

休館日:火曜日(ただし3月20日は開館)、3月21日(水)

開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)

違いを楽しむことが考える力をつける第一歩

石見美術館では現在「mite!ね。しまね」と題した展覧会の準備を進めている。この展覧会は、島根県所蔵の優品を中心とした80点余りの作品を展示するという“名品展”の性格と、展示構成を「対話による鑑賞」に適するようにしつらえることで“鑑賞教育”、あるいは“教育普及”的な性格とを併せ持つ展示とする予定だ。島根の優品を、普段とは少し違った方法でじっくりじろじろと見てほしい、そんな思いを込めてタイトルを付けた。

「対話による鑑賞」とは、10～20名ほどのグループで作品を取り囲み、話し合いを重ねながら作品を見ていく方法をいう。この方法では、作者が誰か、タイトルが何か、いつ作られたのか、ということはまず無視する。というよりも、わざと横においておき、作品そのものを可能な限りくまなく見る。展示の際にはキャプションを取ることもある。作品の周辺的な情報を得ることで「作品を見た」と思い込むことを防ぐための工夫である。そうして「その場で」作品を見て得た情報を元に話し合いをする。10～20名ほどのグループで作品を取り囲み、話し合いを重ねながら見ていくと、作品はおもしろいように子細に見えてくる。描かれた風景に落ちる影、その長さや濃さから季節を想像し、持ち物や衣装から、描

かれた人物の身分や役割に考えを巡らす。作品の様々な要素が鑑賞者それぞれの感想とともに見出され、ひとつの作品をめぐる複数の解釈、複数の物語が立ち現れる。そこで、参加者は鑑賞者としての想像力を試され、鑑賞とは能動的な行為であることに気づかされる。作者の意図をくみ取ればよい、それで終わり、とはならないのだ。美術作品を見ることを通して考える力を養うこと、これが「対話による鑑賞」の一番の目的なのである。

この夏、「対話による鑑賞」を実践するための研修会を開催した。「対話による鑑賞」は、集団に発言を促し、整理し、まとめ、拡げるなどしながら鑑賞の時間を進めるリーダーのような人を必要とする。その仕事のポイントを学習し、リーダーになれる技術を身につけよう、というのが研修の目的だった。本展監修の上野行一教授(帝京科学大学)、奥村高明教授(聖徳大学)、そして林寿美学芸員(川村記念美術館)を招いて、2回にわたり開催した研修会には島根県下の小中学校教諭、美術館のトークボランティア、島根大学で美術教育を学ぶ学生など、のべ40名ほどの参加があった。初回はまず「対話による鑑賞」とはいかなるものかという講義で始まり、次に参加者全員が鑑賞

者となって「対話による鑑賞」を体験、その後は展示室で作品を前にしながら参加者が順にリーダーとなってトークを実践した。二回目の研修では、「対話による鑑賞」の応用としてアートカードを用いてのゲームを実習したあと、「対話による鑑賞」の陥りやすい失敗について話を聞いた。

個人的なことを言えば二度の研修でトークの技術を身につけることは難しかったが、リーダーを務める際の「気構え」のようなものは得られたように感じている。最も気をつけるべきことは、どの意見も否定しないことではないかと思う。自分とは違う意見を楽しむ視点、これを相づちの形をもって提案すること。解釈の可能性を否定しないこと。そうすることが、与えられる情報を待つのではなく、鑑賞者自らが作品に入り込んで必要な情報を探し出す力となり、また自分と同等の他者をも認め、自己の考えを精査させるきっかけとなるのではないだろうか。

小説を読んで、行間に込められた作者の思いを想像したり、主人公の心情を想像したりする。「mite!ね。しまね」ではそんな風に美術作品を経験して、考えることのおもしろさを知って帰ってほしいと考えている。

(廣田理紗 当館学芸員)



上野教授による講義の様子



奥村教授によるアートカードを使った実習の様子



作品の前に「対話による鑑賞」を練習する様子